

三月十日

八時起床。昨夜は泥のように眠った。沖縄のカレーがまだ胃にもたれている。TVをつけるも、うるさくて、すぐに消す。TVの諸テストと比較すれば、沖縄のカレーだって、まだましか。ホテルで朝食をとり、九時半、国建の車で尚弘子先生をお宅にてピックアップして北部、大宜味村へ。車の中で尚先生の琉球王朝からの歴史、食文化の事。色々とお話しをうかがう。駐日アメリカ大使も無視できぬ存在である。沖縄駐留アメリカ軍の事等、尚先生のアメリカに対するアンビバレンツな深い感覚が知れて面白かった。尚先生は、謂わゆる高校時代は無く、沖縄特有のハイスクール時代を経てアメリカの大学に留学された。そのアメリカが戦勝国として琉球王朝の始まりを作った尚家の歴史の中の自分の琉球へ、つまり沖縄の何分の一かを占領し基地としている、現実。それを淡々と話して下さったのだが、尚弘子さんの口から話していただと、実に大きなリアリティーが感じられるのだった。遂々、尚先生に沖縄のカレーはまずいなんて、言わずもがなの事を口走ってしまい市場の中においておいしいカレー屋があるし、インドカレーだって良い店ありますよと軽く一蹴されてしまった。私としては、沖縄固有の食文化、それは中国の影響が大きいと聞くが、そのアイデンティティを過剰な程に重視したいと言いたかったのだが、その話しの組み立て方が下手で、入口の沖縄のカレーはまずいという所で、話しは終わってしまった。沖縄の食文化の最高権

威に言いがかりをつける結果になってしまい、又も深く恥じた。よく、こういう事をやるんだナア、私は。尚先生は車中隣の座席で、この馬鹿オヤジ急は何を言いだすのだ、という表情で聞き流していたが、眼はキラリと光った。確かに。琉球王朝の眼だったな、その時は。十二時前大宜味村着。村長、助役にあいさつ。昼食は道の駅で尚先生と沖縄そば。店で売っていた木酢液の原液、なんとなく気になって買い込む。十三時、委員会。十五時過修了。役場で東参事、野村、照屋君とワークショップ準備の打合わせ。私は一足先に十七時大宜味村を発つ。十九時那覇空港着。このメモを記している。

沖縄のワークショップで試みたいのは「長寿村の設計」という建築、都市の概念を離れた、もう少し広々とした、万人とは言わなくても、多くの人間が身近に感じている、それぞれの現実生活を支えている生命、（これは生きる実感、リアリティーと言い換えられるのだが）と、生命維持と人間関係、コミュニティ、自然の力を生かしたフィールド（農園）を視える形にしたい、と考えている。これまでの数々のワークショップ活動で得られた体験に、初めて、一つの現実的な枠組の中でプロジェクトを作ってみる。ユイマール、集住体の可能性。二十一世紀の反都市的農場。長寿・いやし研究所のソフト設計。などを、ブナガヤの里、芭蕉布の里、シークアサーの里のチームに別れて、知恵を出し合ってみたい。

三月十五日、初日の課題は、私が主催したワークショップに共通して課した、「あなたの母さんが死を迎える家」を出題して、それぞれの参加者の能力を見極め、夕方にプレゼンテーション、十五日の夜にはチーム編成をしよう。先ず、四つのチームの主題を先に示し、次に「母の家」の課題を課せば、その人間の才質の

大方は解るだろう。明日、参加者全員に、第一の半日課題をメールで送ろう。メールは、「沖縄北部大宜味村のワークショップに参加していただき、ありがとう。」ところで、初日、第二講、尚弘子先生のレクチャー後に開始されるワークショップの第一課題は、あなたの年老いたお母さんが、アト二年位の余命であると医師から宣告されました。そのお母さんのそれからのライフスタイルと支援介護を設計せよ、にする。建築寄りの人は家、又は部屋、その他の人は人生のプログラムを設計しなさい。「死を待つ、母の家」というものにしよう。尚先生のレクチャーが十二時一〇分に終るから、昼食と散歩、を入れて、十四時に作業開始。十九時修了。二〇時クリティーク開始して、二十三時修了。二十四時迄にチームづくりを終えたい。大宜味村小学校の子供達をワークショップに参加させたい。明日、野村に指示しよう。マザーテレサの死を待つ人の家、ヘレン・ケラー記念塔、ツリーハウス、難民のための超ハイテク病院、コロ島コンペ案（生命都市）、松崎町のまちづくり、唐桑町、気仙沼、バリ島、「唐桑ものがたり」をレクチャーのはじまりにするぞ。あの計画も箱をつくらずに何処まで行けるかっていうものであった。大体、視えてきた。今、二十二時前、まもなく飛行機は降下を始めるだろう。羽田着二十二時三〇分。

○時三〇分世田谷村帰着。

磯崎新のGADドキュメント77の論文読む。